

在宅保育 3 歳児環境の調査と解析

川本昌子* 柳川育子* 谷口尚樹* 舘石捷二*

A Survey of the Enviroment for Children at Three

Masako Kawamoto, Ikuko Yanagawa, Naoki Taniguchi, Syouji Tateishi : Kyoto
Municipal Jr. College of Nursing

ABSTRACT

In 1988, in a residential district of Kyoto, a brief survey in the form of a questionnaire was made concerning the playing and learning conditions for preschool children.

The subjects consisted at 245 mothers rearing children of three years of age. The questionnaire was written by mothers and consisted at 38 items and 5 dimensions (play-persons, -things, -places, state of daily life, and state of health).

Descriptions of the actual conditions, comparisons between sexuality, birth order, and between home-rearing and day-nursery children were conducted statistically. Correlation analyses were also made between the environmental items, the state of daily life, respectively. It was concluded that in this residential area environmental disruptions might be advancing in severity in the 'school' for the preschool children.

キーワード

遊び相手 playmates

遊び道具 playthings

健康 health

生物時計 biological clock

生活空間 playplaces

* 京都市立看護短期大学

I 緒 言

この研究は、地域における就学前の子どもの生活環境の実態、その概要をとらえることを主目的として行ったものである。

文明の進歩・人工的環境の拡大・普遍化は、感覚鈍化をはじめとして、人々の生活や健康に気がかりな影響をもたらしている。環境を学習教材とし、感覚器を駆使して環境と相互交渉する子どもの特性（ブラゼルトン1988）から考えれば、環境状態のいかんはきわめて重要な事柄である（宮地ら1984、弓削1985、佐藤ら1987）。

この人工的環境拡大の実態を、幼児を中心としてとらえた調査データは少なくともこの地域にはまだないことから、学生の看護研究の一環として保健所の協力のもとに探りを入れてみることを試みた。結果は意外に興味深い知見が得られたので報告する。

さらに、保健所事業に割り込む調査であることから、調査項目は必要最小限にとどめ、環境が主でその影響には重点をおかなかつた（健康項目は10項目のみ）にもかかわらず、多項目間の相関係数行列の要約について新しい方法を試みることによって、ここでも興味ある知見が得られた。

II 方 法

1. 調査の対象と方法

1988年9月、京都市西部の住宅地にある右京保健所において、3歳児健康診査（受診率約8割）を待ち合わせ中の母親245人に、質問紙を教師および学生が手渡して、その場での自記回答を依頼した。質問紙は、当日の診査対象児の、日常の遊び相手、遊び道具、遊び場所、生活状況および健康状態の5次元に関する計31項目（原則として、はい、いいえ、△の3項目選択法）とフェイスシ

ート関係の7項目で構成した。回答所要時間は10分前後、回収率は100%であった。

2. 解析の対象と方法

2-1) 解析対象児数

	在宅保育児		通園保育児	
	第一子	その他	第一子	その他
男	47人	32人	13人	27人
女	38	25	11	21

2-2) 解析方法

(1) 属性間で率の比較を行うにあたっては必要に応じて、より下位の属性別率の等価平均による訂正率 (adjusted rate) を用いている。また、その際の統計学的有意差検定は Mantel-Haenszel 検定によっている。(III-B, 表2~4が該当。)

(2) 多項目間の相関係数行列の1つの要約の仕方として、寄与率をプラス方向のそれとマイナス方向のそれとに分けて観察する方法を試みた。(III-C, 表5および6が該当。)(因子分析法において〔寄与率〕は、‘各因子の、全変数への寄与の程度’と定義され、 Σ (因子負荷量)² / (変数の数) の計算式がよく用いられている。今回の解析で〔寄与率〕は、形式的にこれを模したもので、現象学的な概念である。)

III 結 果

(以下、本節で項目名の肩に付けたルビは考察の節で引用のためのコード番号である。)

III-A. 学習環境の実態観察

表1で、児の学習環境を、1日30分以上の遊び相手¹、既成玩具外の遊びの対

表1 在宅保育3歳児学習環境の実態

項目別率 (N=142人 1988年 右京)

項目	率
祖父母と遊ぶ時間1日30分以上	27.0%
年下の子と遊ぶ時間1日30分以上	40.4
父親と遊ぶ時間1日30分以上	55.4
同年の子と遊ぶ時間1日30分以上	56.9
年上の子と遊ぶ時間1日30分以上	64.3
母親と遊ぶ時間1日30分以上	93.5
家では動物・金魚等を飼っている	36.6
親の手作りおもちゃをもっている	47.3
砂遊び・泥んこ遊びをよくする	66.7
日用品やがらくた等でよく遊ぶ	81.9
積み木・ブロック類	78.8
三輪車類	56.5
人形・縫いぐるみ類	45.6
ミニカー・レール物類	45.1
ボール類	30.5
既成品のおもちゃの数30個以上	67.4
絵本の数20冊以上	93.0
テレビ視聴時間1日1時間未満	5.7
寝る時刻9時以前	16.8
規則正しい生活を送っている	61.7
外遊びの時間1日1時間以上	78.1
近くに児童館や子ども文庫	30.2
近くに遊べる原っぱや空き地	38.2
近くに公園やちびっこ広場	64.7
家の周りに走り回る場所	66.1
家の中にはい回る場所	77.3

類⁴が各45, 46, 56%と続き, 積み木・ブロック類⁵は79%で第1位にみられる。

なお, 既成の玩具30個以上⁶および絵本20冊以上⁷(保有)は各67, 93%と高く, 玩具多保有型の傾向である。

A 4. テレビ1日1時間未満の視聴¹(TV視聴に親の配慮がうかがわれるケ

象物², 愛用の玩具³(ふだんよく遊ぶもの3つまでの回答), 生活時間⁴および生活空間⁵についてみると次のようである。

A 1. 社会適応学習上重要な遊び相手となっている率は, 縦の受動的学習関係では, 祖父母¹が最も低く27%であり, 父親²および母親³は各55, 94%と高くなり, 祖父母<父親<母親型の傾向である。

一方, 横の相互的学習関係は, 年下⁴, 同年⁵および年上児⁶が各40, 57, 64%で, 下<同<上型の傾向といえる。

A 2. 既成玩具外の遊びの対象物の存在または利用の率は, ペット¹および手作りの玩具²(あり)が各37, 47%とやや低く, 砂や泥³および日用品やがらくた類⁴(よく遊ぶ)が各67, 82%でかなり高い。

A 3. 既成玩具の種類別愛用率は, ボール類¹が最も低く30%で, そのほかは, ミニカー・レール物類², 人形・縫いぐるみ類³, 三輪車

ース)は6%に過ぎず、夜9時以前の就寝²も17%とごく低率である。規則正しい生活³および1日1時間以上の戸外生活⁴は各62, 78%と100%にはほど遠く、テレビ漬け・夜更かし・こもらせ型の傾向がみられる。

A5. 環境適応学習の絶好の場としての原っぱ・空き地¹およびその代用としての児童遊園・ちびっこ広場²(近くにあり)が各38, 65%で、近辺が自然的遊び空間不足状態である。

一方、運動機能の発達促進上重要な、家の周り³および住居内の運動空間⁴(十分)は各66, 77%と、その重要性からみれば家族視野内運動空間不十分状態に

表2 在宅保育3歳児学習環境の男・女間比較

項目別率*の比(N=79対63人)*性・第一子その他別率の等価平均

項目	男/女	男	女
年下の子と遊ぶ時間1日30分以上	0.9	37.9%	43.0%
母親と遊ぶ時間1日30分以上	1.0	93.2	93.8
祖父母と遊ぶ時間1日30分以上	1.0	27.5	26.6
年上の子と遊ぶ時間1日30分以上	1.0	64.4	64.3
同年の子と遊ぶ時間1日30分以上	1.0	55.9	58.0
父親と遊ぶ時間1日30分以上	1.1	57.3	53.6
家では動物・金魚等を飼っている	0.8	32.1	41.1
親の手作りおもちゃを持っている	0.9	44.7	50.0
日用品やがらくた等でよく遊ぶ	1.0	81.0	82.8
砂遊び・泥んこ遊びをよくする	1.1	68.8	64.6
人形・縫いぐるみ類	0.2*	13.7	77.4
ボール類	0.8	27.4	33.6
三輪車類	1.0	57.3	55.7
積み木・ブロック類	1.1	83.6	74.0
ミニカー・レール物類	32.4*	87.4	2.7
既成品のおもちゃの数30個以上	1.1	70.1	64.7
絵本の数20冊以上	0.9	82.2	93.8
寝る時刻9時以前	0.6	12.6	21.1
テレビ視聴時間1日1時間未満	0.7	4.7	6.7
外遊びの時間1日1時間以上	0.9	75.3	81.0
規則正しい生活を送っている	0.9	59.9	63.6

ある。なお、児童館や子ども文庫⁵（近くにあり）は30%と、施設利用不便状態でもある。

III-B. 学習環境の比較観察

表2～表4で、男児^x、第一子^yおよび在宅保育児（対・通園児）^zの学習環境*の各特徴をみると次のようである。（*ここでは「生活空間」は取り上げない。）

BX. 男児は女兒に比べて、

既成玩具の種類別愛用率では、人形・縫いぐるみ類¹がかなり低率(0.2倍)で、

表3 在宅保育3歳児学習環境の第一子・その他の比較

項目別率*の比(N=85対57人)*性・第一子その他別率の等価平均

項目	一子/他	第一子	その他
年下の子と遊ぶ時間1日30分以上	0.3*	32.9%	95.8%
父親と遊ぶ時間1日30分以上	1.1	58.9	52.1
母親と遊ぶ時間1日30分以上	1.1	97.0	90.1
同年の子と遊ぶ時間1日30分以上	1.2	61.2	52.7
年下の子と遊ぶ時間1日30分以上	1.3	45.1	35.9
祖父母と遊ぶ時間1日30分以上	1.4	31.5	22.5
親の手作りおもちゃをもっている	0.9	43.6	51.1
家では動物・金魚等を飼っている	0.9	33.7	39.6
日用品やがらくた等でよく遊ぶ	0.9	79.2	84.6
砂遊び・泥んこ遊びをよくする	0.9	62.9	70.7
三輪車類	0.8	51.8	61.3
人形・縫いぐるみ類	0.9	44.1	47.1
積み木・ブロック類	1.0	79.4	78.2
ミニカー・レール物類	1.1	46.3	43.8
ボール類	1.2	32.8	28.3
既成品のおもちゃの数30個以上	1.7*	84.7	50.3
絵本の数20冊以上	1.1	91.2	84.9
寝る時刻9時以前	0.2*	5.9	27.8
テレビ視聴時間1日1時間未満	0.3	2.7	8.6
規則正しい生活を送っている	0.7*	52.4	71.2
外遊びの時間1日1時間以上	1.2*	85.4	71.0

ミニカー・レール物類²がごく高率(32.4倍)であり、男児では、人形類<ミニカー類型の傾向がみられる。

率の整列を玩具の種類名の頭文字を用いて男女別に表すと、

男³:人, ボ, 三, 積, ミ (各14, 27, 57, 84, 87%)

女⁴:ミ, ボ, 三, 積, 人 (各3, 34, 56, 74, 77%)

となる。

BY. 第一子はその他に比べて、

1. 遊び相手の種類別の率で、年上児¹がごく低率(0.3倍)である。横の相互

表4 在宅保育3歳児学習環境の在宅・通園児との比較

項目別率*の比(N=142対72人) *性・第一子その他別率の等価平均

項目	在宅/通園	在宅児	通園児
同年の子と遊ぶ時間1日30分以上	0.6*	56.9%	92.7%
年下の子と遊ぶ時間1日30分以上	0.6*	40.4	64.5
父親と遊ぶ時間1日30分以上	0.9	55.4	58.7
年上の子と遊ぶ時間1日30分以上	0.9	64.3	72.5
母親と遊ぶ時間1日30分以上	1.1	93.5	86.0
祖父母と遊ぶ時間1日30分以上	1.1	27.0	23.6
砂遊び・泥んこ遊びをよくする	0.8	66.7	87.4
日用品やがらくた等でよく遊ぶ	0.9	81.9	86.5
親の手作りおもちゃをもっている	1.0	47.3	45.6
家では動物・金魚等を飼っている	1.3*	36.6	28.6
ボール類	0.8*	30.5	37.4
積み木・ブロック類	1.0	78.8	76.2
ミニカー・レール物類	1.0	45.1	43.8
人形・縫いぐるみ類	1.1	45.6	43.4
三輪車類	1.4*	56.5	39.8
既成品のおもちゃの数30個以上	1.0	67.4	66.5
絵本の数20冊以上	1.0	93.0	95.6
テレビ視聴時間1日1時間未満	0.5	5.7	11.9
規則正しい生活を送っている	0.7*	61.7	84.9
外遊びの時間1日1時間以上	0.8*	78.1	94.8
寝る時刻9時以前	1.3	16.8	13.4

的学習関係の型別を比べると、第一子は上<下<同型²、その外は下<同<上型³である。

2. 既成玩具30個以上¹保有が高率(1.7倍)であり、第一子は特に玩具多保有型である。

3. 生活時間では、夜9時以前の就寝¹および規則正しい生活²でごく低率(各0.2, 0.7倍)、戸外生活1時間以上³が高率(1.2倍)であり、第一子は生活不規則遊び型である。

BZ. 最近の在宅保育の3歳児は、同年齢の通園保育児に比べて、

1. 遊び相手の種類別の率では、同年¹および年下²とともに低率傾向(ともに0.6倍)である。横の相互的関係の型別は、在宅保育児が下<同<上型³であるのに対して、通園児は下<上<同型⁴である。

2. 遊びの対象物の種類別存在または利用の率では、砂・泥¹が低率傾向(0.8倍)で、在宅児は避汚れ遊び型のようなものである。

3. 既成玩具の愛用率では、三輪車類¹が高率傾向(1.4倍)である。

率の整理を玩具の種類名の頭文字を用いて在宅・通園保育児別に表すと、

在宅児²: ポ, ミ, 人, 三, 積 (各31, 45, 46, 57, 79%)

通園児³: ポ, 三, 人, ミ, 積 (各37, 40, 43, 44, 76%)

となる。

4. 生活時間では、規則正しい生活¹および戸外生活1時間以上²がともに低率傾向(各0.7, 0.8倍)であり、在宅児は生活不規則引きこもり型のようなものである。

III-C. 環境と生活・健康との関係

C1. 表5-④で、子どもの生活態度に関する4項目*への寄与率のレベル別に環境項目をあげてみると次のようである。(*生活態度4項目: 戸外遊時間長, TV視聴時間短, 生活規則正, 就寝時刻早.)

a. <生活態度への+の寄与率 $\geq 4\%$ >がみられる環境項目は、毎日同年児と30分以上遊ぶ¹(寄与率: 男+6-0%, 女+4-0%), 年上児と遊ぶ²(5-0, 2-0%), 遊び仲間の種類多い³(5-0, 5-0%), 砂・泥遊びをよくする⁴

表5-④ 各環境項目の、生活態度4項目への+-別寄与率 (男女別)

項目	男	女	項目	男	女	
A. 遊祖父母	1 -1%	0 -0%	積み木好遊	0 -1%	0 -2%	
遊父親	1 -1	0 -1	玩具数多	0 -0	0 -1	
遊母親	0 -0	3 -0	絵本数多	2 -0	3 -0	
遊年下児	1 -0	2 -1	E. 原っぱ近在	4 -0	1 -0	
遊同年児	6 -0	4 -0		児童公園近在	4 -0	1 -0
遊年上児	5 -0	2 -0		家周走回場+	3 -0	4 -0
遊家族種類多	0 -1	0 -0		家内這回場+	1 -0	1 -1
遊仲間+	5 -0	5 -0		児童館近在	1 -0	3 -0
B. ペット+	0 -1	0 -0		遊空間種類多	7 -0	4 -0
				手作玩具+	2 -0	2 -0
			砂泥好遊	2 -0	5 -0	
			日用品類好遊	1 -2	0 -0	
			遊物種類多	2 -0	4 -0	
C. ボール好遊	3 -0	0 -1	F. 居住階	長子	0 -0	1 -0
				末子	0 -5	0 -7
				同胞数	6 -0	2 -0
				父年齢	0 -0	2 -0
				母年齢	0 -1	2 -0
ミニカー類好遊	0 -1	0 -3	母職業+	1 -1	1 -0	
人形類好遊	0 -0	0 -1		0 -0	2 -2	
三輪車類好遊	2 -0	2 -0				

注1) ①寄与率の計算法例示：毎日祖父母と遊ぶ (+, - : 1, 0点) と戶外遊び時間 (長→短 : 3, 2, 1, 0), TV視聴時間 (短→長 : 3, 2, 1, 0), 生活規則 (正, 否 : 1, 0), 就寝時刻 (早→遅 : 3, 2, 1, 0) との相関係数 = -0.20, -0.06, 0.12, 0.09.

② $100(0.12^2 + 0.09^2) / 4 = 0.56 \div 1\%$ (+の寄与率, 第1行第1列の数値).

③ $100(-0.20^2 - 0.06^2) / 4 = -1.09 \div 1\%$ (-の寄与率, 第1行第2列の数値).

注2) 絶対値が2以上の寄与率の基資料は表5-⑥参照.

(2-0, 5-0%), 遊びの対象物(玩具外の)の種類多い⁵(2-0, 4-0%), 原っぱ・空地が近くにある⁶(4-0, 1-0%), 児童公園が近くにある⁷(4-0, 1-0%), 家の周りに走り回る場所がある⁸(3-0, 4-0%), 遊び空間の種類が多い⁹(7-0, 4-0%) および末子¹⁰(6-0, 2-0%)である。(第一子¹¹では逆に0-5, 0-7%となっている.)

b. 上記以外で〈生活態度への+の寄与率=3%〉がみられる項目は, 毎日母親と遊ぶ¹(0-0, 3-0%), ボール類でよく遊ぶ²(3-0, 0-1%), 絵本の数が多

表5-⑧ 環境項目と生活態度項目との相関係数 (男<左列>女<右列>)

項 目	戸外遊 時間長	T V視聴 時 間 短	生活規則正	就寝時刻早
遊 同 年 児	.5 .4	.2 -.0	.0 .1	-.0 .1
遊 年 上 児	.0 .2	.2 -.1	.2 .0	.4 .2
遊 仲 間 +	.4 .4	.2 -.1	.1 .1	.2 .1
砂 泥 好 遊	.2 .4	.1 .1	-.1 .1	.1 .2
遊 物 種 類 多	.0 .4	.2 .0	-.1 -.1	.2 .1
原 っ ぱ 近 在	.2 .2	.3 -.1	.2 -.1	.0 -.1
児 童 公 園 近 在	.2 .2	.2 .0	.2 -.1	.1 -.1
家 周 走 回 場 +	.3 .4	.1 .0	.1 .1	.1 .1
遊 空 間 種 類 多	.3 .4	.3 .0	.2 .0	.1 .0
未 子	-.1 .1	.2 .0	.2 .0	.4 .3
遊 母 親	.0 .3	.0 .1	-.1 .1	-.1 .1
ボ ー ル 好 遊	.0 .0	.2 -.2	.3 -.1	.2 -.1
絵 本 数 多	.1 -.0	.2 -.1	-.1 .1	.1 .3
児 童 館 近 在	.1 .3	.1 .1	.1 .1	.0 .1
手 作 玩 具 +	.1 .2	.2 -.0	.0 .0	.1 .1
三 輪 車 類 好 遊	.3 .3	.0 .1	-.0 .0	-.1 .1
同 胞 数	-.1 -.1	-.1 .1	-.0 .1	.0 .3
父 年 齢	-.1 -.1	-.2 .1	-.1 .1	.0 .2
積 み 木 好 遊	-.1 -.3	-.2 .1	.0 .0	-.1 .0

注) 男77, 女94.5%水準で有意な相関係数: 男 .22, 女 .21.

い³ (2-0, 3-0%) および児童館が近くにある⁴ (1-0, 3-0%) である。(ミニカ
一類でよく遊ぶ⁵では0-1, 0-3%となっている.)

c. そのほかに<生活態度への+の寄与率=2%で,-の寄与率=0%>がみ
られる項目として, 手作りの玩具がある¹ (2-0, 2-0%), 三輪車類でよく遊ぶ²
(2-0, 2-0%), 同胞数が多い³ (0-0, 2-0%) および父親の年齢⁴ (0-1, 2-0%)
がある。(積み木類でよく遊ぶ⁵では0-1, 0-2%となっている.)

(表5-⑧は, 上記環境21項目について, 寄与率計算の基資料を概数として示
している.)

C2. 同様に表6-④で, 子の現在の健康状態に関する6項目*への寄与率の
レベル別に環境項目を拾ってみると次のようである。(健康状態6項目: 抵抗

表6-④ 各環境項目の、健康状態6項目への+-別寄与率 (男女別)

項目	男	女	項目	男	女
A. 遊祖父母	1 -0%	0 -1%	D. TV視聴時間短	2 -0%	0 -0%
遊父親	0 -1	1 -0	就寝時刻早	1 -0	2 -0
遊母親	2 -1	2 -1	生活規則正	1 -0	2 -0
遊年下児	1 -1	1 -1	戸外遊時間長	3 -0	2 -1
遊同年児	4 -0	1 -1	E. 原っぱ近在	0 -0	1 -1
遊年上児	1 -1	1 -0	児童公園近在	0 -1	1 -0
遊家族種類多	0 -1	2 -1	家周走回場+	1 -0	2 -1
遊仲間	2 -0	1 -0	家内這回場+	1 -0	1 -0
B. ペット+	0 -1	1 -0	児童館近在	1 -1	1 -1
手作玩具+	2 -0	1 -0	遊空間種類多	1 -0	1 -1
砂泥好遊	2 -1	1 -0	F. 居住階	0 -1	1 -0
日用品類好遊	1 -0	1 -1	長子	1 -1	0 -2
遊物種類多	1 -0	2 -1	末子	1 -0	2 -0
C. ボール好遊	1 -0	0 -1	同胞数	0 -1	1 -0
ミニカー類好遊	0 -0	0 -0	父年齢	0 -1	1 -0
人形類好遊	1 -1	3 -0	母年齢	0 -0	1 -0
三輪車類好遊	0 -1	0 -0	母職業+	1 -0	0 -1
積み木好遊	0 -0	1 -1			
玩具数多	1 -1	0 -0			
絵本数多	4 -0	0 -0			

注) 寄与率の計算方法：環境および生活態度項目と抵抗力、自立性、自制力、運動機能、模倣力、情操面の発達状態（早、遅：1、0点）との相関係数に基づき、表5の注と同様にして求めた。絶対値が2以上の寄与率の基資料は表6-④参照。

力、自立性、自制力、運動機能、模倣力、情操面の発達状態に関する項目である。)

a. <健康状態への+の寄与率 \geq 4%>がみられる環境項目は、毎日同年児と遊ぶ¹（男4-0%、女1-1%）および絵本の数が多い²（4-0、0-0%）である。

b. 上記以外で<健康状態への+の寄与率=3%>がみられる項目は、人形類でよく遊ぶ¹（1-1、3-0%）および戸外遊びの時間が長い²（3-0、2-1%）である。

表 6-⑧ 環境項目と健康状態項目との相関係数 (男 <左列> 女 <右列>)

項 目	抵抗力 ¹⁾		自立性 ²⁾		自制力 ³⁾		運動機能 ⁴⁾		模倣力 ⁵⁾		情操面 ⁶⁾	
遊 同 年 児	.3	-.3	.1	.1	.3	.0	.0	.0	.2	.1	.2	.1
絵 本 数 多	.0	.1	.3	.1	.1	.0	.2	.1	.2	.0	.2	-.0
人 形 類 好 遊	.0	.0	.0	.0	-.1	.1	-.2	-.1	.2	.4	.0	.1
戸 外 遊 時 間 長	.3	-.2	.1	.2	.1	-.2	.2	.1	-.0	.0	.1	.2
遊 仲 間 +	.1	-.1	.2	.2	.1	-.0	-.0	.0	.3	-.0	.1	.1
手 作 玩 具 +	-.0	-.1	.2	.1	.2	.2	.1	-.1	.2	.0	.0	.1
TV 視 聴 時 間 短	-.0	.1	.1	.0	.2	.1	-.1	-.1	.1	-.0	.2	.0
就 寝 時 刻 早	.0	.2	.1	.1	.1	.1	.1	.1	.1	.2	-.0	-.1
生 活 規 則 正	-.0	.2	.1	.2	.2	.2	.1	.2	.1	.1	.0	.2
末 子	.0	.1	.1	.2	.2	.1	-.0	.1	.0	.2	-.0	-.0

注 1) カゼをひきやすい— 2) できることもすぐ誰かを頼る— 3) すぐかんしゃくを起こす— 4) 走ったり跳んだりが上手なほう 5) ごっこ遊びをよくする 6) 花・虫・音楽に関心示す。

注 2) 男77, 女94.5%水準で有意な相関係数: 男 .22, 女 .21.

c. そのほかに<健康状態への+の寄与率=2%で,-の寄与率=0%>がみられる項目として、遊び相手の種類が多い¹ (2-0, 1-0%), 手作り玩具がある² (2-0, 1-0%), TV 視聴時間が短い³ (2-0, 0-0%), 就寝時刻が早い⁴ (1-0, 2-0%), 生活規則正しい⁵ (1-0, 2-0%) および末子⁶ (1-0, 2-0%) がある。(第一子⁷では逆に1-1, 0-2%となっている。)

(表 6-⑧は, 上記環境11項目について, 寄与率計算の基資料を概数として示している。)

IV 考 察

前節に基づいて応用上の意義を考察する。

1. 学習環境の実態観察

3歳児と祖親とが遊び合う機会が少ないという実態は, 老年人口の増加傾向に反して, 3世代世帯の減少傾向(日本子ども資料年鑑1990, 吉川1990)にあ

ることの1つの表れであろう。しかし、長い人生を生き抜いている英知は、若さや生産性だけでは太刀打ちできないものを伝承できる宝庫であろうという見方もできる。祖親は、親子関係とはひと味違う‘まなごし’（北本1986）の保有者としてその役割は重要に思われる。近年は、幼児期から受験競争もあり、自分のためにのみ生きることを目標において育てられる傾向が強い。祖親との関係を深め、ゆとりの懐の中で味わう快感、祖親の世話や死を見るといった体験は、子どもに死生観を含め人生を考える素材として貴重なものである。また、社会が‘人間は死ぬまで現役’という考えを常識として強化していけば、老年期におけるその人の生きがいや年齢からの解放にもつながり、生き生きとした祖親は若い世代のよきライバルともなり、世代間の確執よりも心豊かな相互扶助態勢を生むことになる。 (ⅢA1-1)

父親は母親の約半分の率で遊びの相手をしている。高度経済成長期を経て、家族関係に対する父親としての価値観の変化や父子間のヒューマンイズムの復活などがかなりみられるようになってきている（リン1981）。一方、母子間は、父子間より強い密着性（小嶋1981）を表しており、本来のその絆の健全な現存が確認できる。(ⅢA1-2,3)

昔は自然発生的に成立した子ども集団であったが、今では容易にはみられないことがわかる。子どもだけの社会の中でもまれること、その中で他人を思いやること、互いに力を合わせ何かを成しとげるなどの経験の場が減少している。核家族単位の地域社会で子ども集団が成立しにくいことや、その成立に大人集団の関心が低いことなどが推察され、幼児の社会的健康面の危機と恐れるべきである。3歳児は、それまでの運動・精神機能および知能の発達がより構造化・具現化していく力強い発達段階にあるため、創造性豊かに遊びきれるタイプ、あるいは鋳型にはめられた博識タイプ、そのほかどのようにでも仕上げられやすい。昔‘子どもらしさ’といわれたものは、結局、純真無垢な冒険的気質を指すものでなかったか、大人のミニチュアではなく、大体のところ、公正で正常な社会性を備えた成人になれる基本的性質であったように思われる。近年は、こういった環境が失われつつあることが明らかで、親子ともども知らず知らず

に、混沌とした悪性的個人主義の中に沈みやすい状況にあるとは言い過ぎであろうか。家庭および地域社会が一体となった幼児の交友関係づくりの実際的な行動とはいかなるものか、課題は大きい。(ⅢA1-4,5,6)

家庭で、生き物と相互関係をもっている子どもが少ない。かつてそれは、飼育や生態観察の学習であり、その過程で愛情を育て、自然や生命の不思議についての関心を深めたという知的・情操的教育の意味があった。この関心は、生態系の一生き物として、人間の存在意義や危険性などを認識する重要な動機へと変化させていけるはずである。(ⅢA2-1)

この年齢で、親手作りの玩具をもたない子が半数以上いるのはさびしい。手作りの物とは、親の心配りの表れといえるであろう。その時そして未来へと、作り手の心が相手に響くという、時空世界を超えた影響力があるように思われる。何かを作り出す親を見ることは、子どもにとっては驚異であり、ゆるぎない力を感じることである。尊敬、安心そして憧れは、未来への躍動力を培う。より高度な概念構築が可能な年齢にいることから、親も心底楽しみながら子どもとの世界を満喫するとよい。(ⅢA2-2)

砂や泥遊びをする子が少ない。砂や泥という素材は質と形が変化しやすいところから、子どもの好奇心をかきたててイメージーションを発達させると同時に、その感触のもつ影響力は大きいであろう。保育実習において多くの学生が泥の気持ちよさについて述べることから、砂や泥遊びは人間と自然との親和性が確かめられ、その感触はいつのまにか人の心を和ませる。着物が汚れるのなど気かけず、泥と遊びきることで、自然とともにあるという体験ができるとすればすばらしい。(ⅢA2-3)

三輪車や積木・ブロック類を愛用しているのに比べてボール、ミニカー・レール物類や人形・縫いぐるみ類を愛用している子が少ない。球体とは、不思議で完全な形である。その動きとして見られる、回転する、弾む、飛ぶなどは、点、直・曲線、場合によっては立体的にも見え、1次元から3次元への空間的变化を感じることができる。球体の動きに伴う追いかけや受け止めなどの身体活動は、快楽・疲労、成功・失敗などの貴重な経験もあるが、空間を素早く移

動する自分の身体を制御できたりできなかったりの奇妙な楽しさの中で、感覚、運動、知的能力を高める重要な意味がありそうである。大きさ、素材、重さなどを変えることで、いろいろな感触を楽しめ、場所の広さに合わせて遊ぶことも可能である。‘おてだま’もボールの延長線上とみれば、さらに広範囲な意義が出てくる。ボールの効用を見直すべきである。また、ミニカー・レール物類や人形類は、この自己中心性・アニミズム時代の小道具として、あるいは、模倣遊戯に伴う実存感覚を養うものとして機能できる。これらを媒体に、その子独自の言葉で、その子の世界を物語る経験が数多くできる機会があるのがよい。

(III A3-1,2,3,4,5)

既成玩具および絵本の保有数が多いと感じるが、小さなものがかなり含まれているようである。ただ、テレビCM、テレビキャラクターに支配されている程度や活用のされ方、絵本の読み方などが気がかりな点である。(III A3-6,7)

テレビ漬けである。テレビからのメッセージに対する幼児の解読作業の特徴として、アニメーションより実写フィルムに強く反応すること、時にその認知能力を超える危険性があること、虚構世界と現実との同一視による情動的覚醒があるなどが明らかにされ、また、変身シーンや動きの激しい戦闘シーンは知覚顕出性が高く、テレビへの注意を喚起する決定因になるといわれる(香取1987)。映像には知覚に対する高い刺激性をもつものがあり、それでテレビに引き込まれてしまう場合があるわけだから、番組内容もさることながら情報の組み立てられ方の影響を念頭において、子ども番組の制作はもちろん視聴する番組を選ぶべきである。短い子ども番組の大半が宣伝活動に終わるものは論外であり、視聴姿勢・距離・時間、画面からの光や画像の作られ方などに関連した感覚器や脳への影響などにも留意すべきである。(III A4-1)

夜更かし・こもらせ傾向にあることは、‘規則正しい生活’といえれば早寝・早起きという従来の認識をもち合わせていない親が多くなっているといえる。帰宅の遅い父親の愛情の押し売りに、睡眠を妨害される子どもも少なくないと聞く。児のサーカディアンリズムや母子間のエンタテインメントなど新生児期から子どもの行動をよく観察し、それぞれの気質に合わせた世話の仕方は、子ど

もの環境適応能に影響する点で重要である（瀬川1985，ケネル1985）。さらに、幼児期に生物時計が生活時計に同期化されていくことにも注目し、3歳児期にはすでに望ましい体内時計を身につけていることを目標とすべきであろう。学童期の不登校傾向の始まりの1つに、幼児期のリズム不調に引きずられた起きられない症候群があるとすれば、マスコミを活用した「子どもは早起き人」などのコピー作りを急ぎ、健康に生きる基本についてのキャンペーンを定着させる必要がある。（ⅢA4-2,3）

成育環境のクルマ都市化が明らかで、子どもの主体的行動である遊びが満喫できない環境にいる。かつては、町中でも子どもが自由に遊べる場所があったが、道路の混雑、高密度市街地化が、遊べる道路、自然などをそぎ取り、子どもらしい学習機会を妨害している。学校と公園は、子どものための配慮しやすい、子どもの施設だといわれる。子どもの健全な成育に必要な地域社会をつくるため、親を中心とした大人たちの意識革新が求められるところである。（ⅢA5）

2. 学習環境の比較観察

在宅保育3歳男児の既成玩具環境は、感触がよくソフトなイメージでやや現実離れした人形・縫いぐるみ類に比べて、より現実的でハードなイメージをもつミニカー・レール物類がひときわ目立つ（ $P < 0.05$ ）。女兒の場合は逆の立場でみることができることから、男児では強さ感、女兒では優しさ感のある環境がつくられていく傾向がある。まずは児の性差に対する親の既成概念が子どもの玩具を選ぶ時に影響するのに加え、一方で子どもの性脳の発達も考えられ（大島1989）、この相互関係が性差に関連した既成玩具環境成立因子として働くのであろうか。（ⅢBX）

在宅保育第一子が弟妹に比べて、自分より年上の子どもと遊ぶ時間が少ないのは、家庭の構成員として初めから年上児がいないため当然ともいえる。できれば年少組として、1日数時間の集団生活を経験させることが望ましい。（ⅢBY-1）

第一子は、既成玩具の洗礼をまず受けやすい。親たちは通常、初めての子ども

もという喜び、珍しさと好奇心などから何かと過剰に与える傾向のようである。さらに、外遊びは親と子の新奇性のある楽しみとなっているのであろう。しかし、不規則夜型生活を送っているこの事実は、子どもはその生活サイクルに対する親たちの無知・無配慮の犠牲者になりやすいことを表している。(III BY-2, 3)

在宅保育児は、同年齢の通園保育児に比べて、同輩間で起こる種々の事柄からの学習機会が少ないこと、砂や泥にまみれるより三輪車などが与えられがちなこと、家の中でドラダラした生活を送りがちなことを知っておくべきである。(III BZ-1,2,3,4)

3. 環境と生活・健康との関係

3歳児が、好ましい生活態度を身につけるのに役立つ学習環境の上位群は、同輩および年上児とよく遊ぶこと、遊んでくれる人の種類が多いこと、砂や泥遊びをよくすること、遊び空間の種類や場所が十分にあること、および第一子外性であり、中位群は、ボールや母親とよく遊び絵本に親しむことで、下位群は、手作り玩具、三輪車、同胞数などであった。これらから、身体を動かし多様なものと関係していける環境が子どもの学習（育つ）能力に大きく影響していることがよくわかる。これは、まさに、親自身の思想や生活態度への問いかけとなっている。(III C-1)

3歳児の健康に役立つ環境では、上位群が、同輩とよく遊び、絵本に親しむこと、中位群は、人形類での遊びおよび戸外遊びをよくすること、下位群は、遊び相手、TV視聴時間の短いことや規則正しい生活が子どもの心身の健康に影響を与えるものとしてあがったが、情操を発達させ体力づくりをしたいという、子ども自身のもつニーズを満たすものといえるであろう。(III C-2)

4. 結 語

1) 在宅保育3歳児の学習環境となる人、遊びの対象物や生物、生活時間、自然・空間および施設などに関してその質と量において、家庭で、政策でまだ

まだ考慮されるべき余地がある。

2) 子どもの成育環境づくりの担い手は、現代社会の担い手の現役の大人たちである。現実には、この大人たちの利便性を優先した環境づくりの傾向にあることは否定できない。しかし忘れてはならないのが過去の社会を担った人たちの立場や視点、さらに、発達の初期段階にある未来を支える子どもたちの視点であり、また、自然や他の生物の生態系の立場である。それらをどのように尊重しているかが子どもの学習環境を整える基本であり、そして、よい環境を保全する環境アセスメントの必要性を強調するものである。

3) 玩具類選択においてかなり性差がみられるが、自然の流れとみることができであろう。

4) 親たちによく浸透させておくべき事柄としては、第一子においては年上児とかかわる経験および生活規則性を重視すること、また、在宅児においては同輩などの遊び仲間が少ないこと、およびルーズな生活を送る傾向がみられるということがある。

V 摘 要

小児の成育環境調査を、京都市右京区管轄保健所の3歳児健診の場を借りて行った。簡便さを求めた調査票にもかかわらず解析方法に若干の工夫を凝らすことにより、子どもをみまもり育む職能として活用していける、子どもの学習環境に関する上記結語のような有益な知見を得た。

稿を終えるにあたり、調査にご協力いただきましたお母様方、右京保健所の職員各位ならびに助言をいただいた岡本萬三郎博士に深謝いたします。

文 献

- 1) D.B. リン著、今泉信人他訳：父親，北大路書房，p.2-14，1981.

- 2) 小嶋謙四郎：乳児期の母子関係——アタッチメントの発達(第2版)，医学書院，1981.
 - 3) 香取淳子：テレビとお話，新しい子ども学第2巻，海鳴社，284-307，1986.
 - 4) 北本正章：近代小児医学と保育の社会史，新しい子ども学第2巻，海鳴社，353-386，1986.
 - 5) 京都市衛生局事業統計，1988，p.24.
 - 6) クラウス・ケネル著，竹内徹他訳：親と子のきずな，医学書院，1985，p.89-107.
 - 7) 宮地文子他：幼児の心身発達と環境に関する一考察（生活環境・生活リズム，食生活行動等の実態），小児保健研究，43(2)：221，1984.
 - 8) NCAST I LEARNER MANUAL, University of Washington, School of Nursing, 1991.
 - 9) 日本総合愛育研究所：1991/92日本子ども資料年鑑，中央出版，1990，p.40-81.
 - 10) 大島清：性は脳なり，大修館書店，1989.
 - 11) 佐藤京子他：大田区大森保健所管内における乳幼児の生活と保育に関する調査（子どもの生活時間と交友関係），小児保健研究，46(2)：137，1987.
 - 12) 瀬川昌也：赤ちゃんの睡眠，新しい子ども学第1巻，海鳴社，470-494，1985.
 - 13) T.B.プラゼルトン，鈴木良平監訳：プラゼルトン新生児行動評価（第2版），医歯薬出版，1988.
 - 14) 弓削マリ子：乳幼児の育児環境と発達に関する縦断的研究，（第4報3歳までの育児環境および性別と3歳時の発達との関連），小児保健研究，44(2)：44，1985.
 - 15) 吉川武彦：高齢化社会，ユリシス，1989.
-